

世界の優秀な人材集め 大学の“大相撲化”を

豊の国かぼす特命大使 黒川 清

別府市の立命館アジア太平洋大学（APU）で昨年 12 月、友人であるカシム学長のお招きで講演しました。外国人留学生が全体の 42% を占め、キャンパスの国際化に驚きましたね。米国・ニューズウィーク誌の記事^{*1}で、国際化に対応している大学として国内で唯一、APU が紹介されました。日本の学生が留学生の持つカルチャーに接し、異なる価値観に目が向く。若者たちに国際ネットワークが広がっています。

世界中を見渡して、日本中心の世界地図を使っている国はどこにもありません。日本は東の端、極東の国です。だが、九州はアジアに近いという地理的条件から、歴史的にも世界への窓でした。稲作がそうだし、種子島への鉄砲伝来もそう。キリスト教布教、江戸時代の鎖国中でも長崎・出島があった。

大分もまさに世界に開かれた窓でした。フランシスコ・ザビエルの布教、ルイス・デ・アルメイダは府内に乳児院や総合病院を建てた。百年前には福澤諭吉が西洋に目を向けようと説いています。

現在は、飛行機が飛び、金融や情報も行き交う。20 世紀は科学とテクノロジーが急速に発達した世界です。戦争に投資して科学技術が進歩しました。だが、この大きな変化もわずかこの百年の出来事です。世紀の発見、技術を生み出したアインシュタインやライト兄弟も現在の世界は想像していないはず。これから百年後はどんな世界になると思いますか？百年後の世界をつくるのは「人」ですから、これからの投資は人材育成に向けるべきです。

人材育成で私が提唱するのが、大学の“大相撲化”です。格式にこだわり、最も保守的だった角界で、今は全体の 8% が外国人力士です。しかも番付が上位になるほど割合が高い。幕内は 30%、三役以上は 40%。世界の優れた大学は外国の優秀な人材を集めています。その点、APU がある大分は、今の日本で唯一、世界に窓が開かれていると言っているでしょう。だから、奨学金を出してでも優秀な留学生に来てもらうことや、大分の皆さんが留学生を受け入れ、交流することが大切です。地域や経済の活性化、少子化対策にもつながる。留学生と日本の若者も世界へ出て行く。「大分で学んで良かった」と思えば、心のネットワークで結ばれ、将来的には国の安全保障の基盤になる。これからは東の東京ではなく、西や南のアジア、そして世界に目を向けるべきなのです。

* 1 : Newsweek 日本版 2006 年 10 月 19 日 pp40-63

** 「豊の国かぼす大使」は、大分県の代表的な特産カボスから名をとり、大使は大分県の産品はもとより、観光、産業、文化など、大分県の良さを広く内外により一層知っていただく活動をしてもらうために名付けました。大分県の発展にひと肌ぬいでもらおうという趣旨です。